

# ひばり最後の曲『川の流れるように』の川は、 滔々と流れるイーストリバーだった

## 昭和歌謡 誕生物語

第二曲目

文山川智

美空ひばりのレコードデビューは11歳、『河童プギウギ』である。1949年のことだ。

以後、ひばりは押しも押されぬ大スターとなり、『歌謡界の女王』として君臨し続けた。一世の天才である。

楽譜が読めずとも一度聞いたら、そのまま唄えた。英語を知らずとも一度聞いたら、完璧な発音で唄えた。死して25年、ひばりの歌声は未だファンを賛嘆させて止まない。

昭和63年4月11日、美空ひばり最後の舞台となった東京ドーム公演。『川の流れるように』は公演後、ひばりが最後にレコーディングしたラストソングだ。

同年10月某日、東京・赤坂にあるコロムビアレコード第一スタジオでは、アルバム『不死鳥パートII』のシングルカットをめぐる、ひばりはじめスタッフによる会議が行なわれていた。通常、アルバムの中からシングルを選曲する場合、インパクトのある『売れ線曲』が選ばれる。そのシングル

のヒットしだいで、アルバムの売れ行きに大きな影響が出るからだ。もともとアルバム『不死鳥』は、ひばりのファン層に欠けていた30代をターゲットに、プロデューサーと作詞を秋元康に依頼したこともあり、スタッフは全員、別の曲を押していた。ところが、一人ひば

りだけが執拗に「シングルは『川の流れるように』でいきたい」と譲らなかつた。

「一滴の雨が木の根を伝い、せせらぎが小川になり、激しい流れがあつちに突き当たり、こつちにはぶつかり、やがて大きくなつて海にたどりつく……人生と同じじゃない」

会議の席でひばりは、そう熱く語つた。それは、波乱万丈だった彼女の人生そのものだったからだ。そして、ひばりの執念が、この曲をシングルとして世に送り出すことになる。

ところで、楽曲が持つ日本的なイメージから詞の中に登場する川は、てっきり日本のどこか、だと思ひ込んでいた。が、実はモチーフはニューヨークを流れるイーストリバーなのだという。作詞を手掛けた秋元は、当時ニューヨークに在住、イーストリバーを眺めているうち、自然



イーストリバーの船着き場風景

と流れるような歌詞が浮かんできたのだという。

通算302枚目となつたこのシングルは翌平成元年1月11日に発売されたが、半年後の6月24日、ひばりは52歳の若さでこの世を去つた。遺作となつたこのシングルがリリース後、100万枚を突破したのは2年後のこと。それは、ゆつくりとした川の流れるように、人々の心の中へと染み入つていったのだつた。

Yamakawa Chi

1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起JYJに行く』『共にイーストプレス』『ビューマンドキュメント 幸せのきずな』(リーブル出版)など。また、出版プロデューサー作品として『生きる 義家弘介』(スタートツ出版)、『生きる社員』(狂食ギヤル)共にイーストプレスなど多数。